

令和7年度歴史講座③ 6月7日講義メモ

講師：三浦 明彦氏 会場：熊西市民センター多目的ホール

文責：中島 浩史

講座テーマ：遠山景元(遠山金四郎景元、遠山左衛門尉景元)

1. 遠山景元の生い立ち

①遠山家

・鎌倉時代から続く名家

⇒鎌倉時代の武将：加藤景朝の子：景廉が美濃国の遠山に住みこの名を称した

→遠山は七家に分かれ、美濃の七遠山と言われた →戦国時代には二家へ

→戦国時代の美濃遠山家と近隣大名(織田家・武田家・上杉家)との結びつき

・岩村城：遠山景任の正室・・信長の年下の叔母(おつや)

・苗木城：遠山友勝の正室・・信長の妹、その娘を武田勝頼へ養女に

⇒秀吉により所領没収 ⇒家康により保護：徳川家旗本へ(遠山景重)

→景重が隠居、実子二人に分地相続(景恒、景吉・・遠山金四郎家の始祖)

②遠山景元の父：遠山景晋(かげみち)

→幼いころより秀才 →小姓組 →御徒侍 →御徒頭 →目付 →長崎奉行

→作事奉行 →勘定奉行

※御徒(おかち)とは、馬上の資格ある侍(与力)より下だが、足軽以上の身分で殿様の籠を警護する役目

※東京の御徒町：一帯に住んでいた下級武士の御徒、御徒組に由来する

※目付とは、旗本や御家人を監視・取り締まる役目

・旗本はお目見えといい、将軍にお会いできる

・御家人は将軍にお会いできない・・同心

※長崎奉行は3000石・・1年に3000人が毎日食うに困らないお米の量(給与)

→名を挙げたのが、長崎奉行としてロシアのレザノフが通商を求めて勝手に

出島へ寄港したが、断固拒否した

※当時、日本は鎖国しており、キリスト教を禁じていた

→キリスト教を布教しないオランダ(蘭)と中国(清)のみ交易

→ロシアは樺太や北海道にたびたび現れて略奪等をしていた

→江戸幕府は東国の大名に命じて北方(蝦夷地)の警備に当たさせた

→今も北海道には「陣屋」跡が残っている

※江戸幕府は北海道方面を良く調べておかねばならないということで調査へ

→1798年近藤重蔵によるエトロフ探検(大日本恵登呂府という柱を立てる)

→1800年伊能忠敬に命じて蝦夷地(北海道)を測量、その後、全国の沿岸を測量

→伊能忠敬を師事した間宮林蔵が樺太とシベリアを探検

※当時、ヨーロッパの航海家からも謎とされていた樺太と大陸間の

海峡を発見 →間宮海峡と名付けられた

③遠山景元の家督相続

⇒遠山 金四郎 景元 ・ ・ 遠山(名字)、金四郎(ファーストネーム)、景元(ミドルネーム)

※金四郎とは「仮名：けみょう」で便宜的に使われた通称

→代々、遠山家では称した →景元は六代目の金四郎

※「左衛門尉(さえものじょう)は冠位

→天皇御所には門が9つあり、正門の左右の衛門(皇宮の守衛)をいう

→衛門の頭は「太夫」、「尉」は太夫に次ぐ位

※宮本武蔵の武蔵は仮名 →本名は「宮本武蔵玄信(まさのぶ)」

→本当は「武蔵守」を望んでいたらしい

⇒景晋には男児がいなかったため養子をもろう (景善：かげよし)

※四代目金四郎(景好)の時から養子を取った後に実子が誕生するのが三代続く

→景晋は養父：景好の実子(景善)をもろうが、その後に景元が誕生する

⇒景元は、景晋の実子でありながら家督を継げないこともあり、若気の至りへ

→家出して10年くらい風来坊、不良と遊び、吉原遊郭の居候も

※歌舞伎の森田座で囃子方の笛を吹いていた

※当時の庶民若者の間で入墨を入れることが流行っていた

景元の彫物は背中の桜吹雪ではなく、右の二の腕に「遊女の生首」

→時代劇での金さんがお白州で腕まくりをして彫物を見せるということは絶対がない

※当時の高級役人は礼儀作法や品格・人格高潔をもっとも重んじていた

※当時、犯罪者には入墨を入れて処罰していた →江戸時代には入墨は重い

→西郷隆盛が流刑の地：奄美大島で愛加那と二度目の結婚をするが

島の風習で女性は結婚をすると左手に入墨を入れるため、本国には

連れて帰ることが出来ず離婚

⇒景善は男児に恵まれず、景晋の実子(景元)を養子へ ※その後、景寿が誕生

→景善の養子となった景元は、文化8年将軍：家斉に御目見得を命ぜられる

その後、部屋住となり西丸御小納戸(備品管理) →御納戸頭

※11代将軍：家斉は歴代最長の将軍職(在位50年：15歳で将軍、65歳で没す)

→正室、24人の側室、お手付20人以上で、55人の子宝に恵まれた

→正室：近衛ただこは公家の近衛家出身で父は薩摩藩島津重豪

→10代将軍：家治の世嗣：家基が急死

→将軍継嗣問題で老中：田沼意次が家斉を人選 →田沼が権勢を振う

→将軍になった家斉は田沼を罷免し、松平定信を老中首座へ

→松平定信の寛政の改革 →厳格過ぎたため家斉と対立へ

→定信を罷免し、大御所政治へ ※大勢の女性を大奥に抱えた

→水野忠成(忠邦の父)を老中首座に任命 →収賄を奨励

→幕府財政破綻 →忠成死後、水野忠邦の天保の改革へ

⇒文政7年に養父：景善が家督を継ぐ前に死亡、文政12年実父：景晋の隠居で家督相続

2. 遠山景元は順調な出世人生

①景元の職歴

文化8年3月：お目見得 →同12月：西丸御小納戸 →天保5年5月：西丸御小納戸頭
→天保6年6月：御小普請奉行 →天保7年8月：御作事奉行 ※左衛門尉を許される
→天保9年：勘定奉行 →天保11年3月：北町奉行
→天保14年2月：大目付 ※大目付→大名が武家諸法度を守っているのか取り締まる
→天保15年2月：朝鮮通信使の来聘につき御用掛
→将軍が替わる際に朝鮮通信使は来聘 ※12回に及ぶ
釜山→対馬藩(宗家)→相島(黒田家)→小倉(小笠原家)→上関(長州毛利家)
→大坂 →京都 →江戸

②水野忠邦との確執

水野忠邦は12代将軍：家慶のときに老中へ →天保の改革をおこなう
→水野家は家康のお母さんの実家の家柄
→肥前唐津城主・・・年貢を絞り上げたため庶民の評判は良くない
→老中へ推挙してもらうための工作(政治資金)
→遠江浜松城主へ・・・老中になったため江戸に近い浜松城へ
※家康ゆかりの格式のある城主
→天保の改革
・「人返しの法」・・・江戸に集まった農民を再び農村に戻し、年貢徴収安定へ
※人が増えれば、犯罪も増加 →言葉訛りで出稼ぎなのか分かる
・「ぜいたく禁止令(儉約令)」・・・化粧もかんざしも絹の着物もダメ、鰻などダメ
お祭りの縁日ダメ、お伊勢参り(旅)もダメ、芝居・落語もダメ、女浄瑠璃もダメ
手品(てずな)ダメ、浮世絵ダメ、銭湯は男女別へ、遊郭も規制へ
・物価引き下げの令・・・株仲間の解散
・借金の破棄・・・金銭の貸し借りに関する訴訟を幕府は取り上げない
・改鑄・・・金の含有量を落とした貨幣で同じ額面で流通
・上地令(あげちれい)・・・江戸・大坂周辺の10里四方の譜代・旗本の領地返還
→経済政策の失敗や儉約しすぎの不人気の決定打となる
※将軍：家慶からも撤回求められる 失脚へ
→景元は、上記取り締まりでは細かいことは良い、無視するようにと指示
vs 南町奉行：鳥居甲斐守耀蔵(ようぞう)・・・鳥居は水野の言った通りに指揮
※庶民は耀蔵のことを「妖怪」にかけて「耀甲斐」と言った
→景元は、水野により逼塞(ひっそく)・・・自宅謹慎、お役御免へ

③水野忠邦の失脚で再び町奉行へ

弘化2年(1845年)3月：南町奉行へ ※町奉行の在職は延べ10年にも
→嘉永5年(1852年)4月：隠居を許される ※「帰雲(きうん)」と改名

→安政2年2月29日に病死 →本郷丸山本妙寺に埋葬 ※お墓は東京都の指定史跡

3. 遠山景元はなぜ庶民に受けたのか

天保の改革の際に水野の命に反対の意を唱えるなど、庶民感覚を失わなかった

⇒彫物を入れているかもしれないし、遊郭にも出入りし、不良連中とも付き合っていた人物が、役人となると家格からもシャキッとして公務にまい進する姿との関連が講談などで創作が創作を生んでいった。

→遊女たちが取り締まられた際に、お白洲での景元を見た遊女が「金さん」と親しげに声をかけてきた。景元は落ち着いて「若いころは自分も遊里で遊んできたが、今はれっきとしたお奉行。遊里のことは十分知っているから嘘偽りを申せば直ぐばれるぞ」と厳粛にいうと、遊女たちは正直に自白した。

→高級官僚とかお奉行などは庶民からは別世界のイメージであったろうが、下情に通じている景元を応援したのだろう。

⇒江戸の賑わい・繁華街が権力による一方的な儉約令や抑圧によって最下層の生活者を抹殺し、江戸の火を消してしまわないように町奉行は武士側であるにも係わらず庶民にも理解を示す姿勢に庶民は共感したのだろう。

4. 余談

・遠山の金さんといえば、最初に中村梅之助、次に杉良太郎、そして松方弘樹「江戸を斬る」では西郷輝彦が金さんを演じ、その奥方を松坂慶子が演じていた。また、金さんをサポートするために紫頭巾で立ち回りをおこなっていた。

・火付盗賊改め方の長谷川平蔵は、町奉行になりたがっていた。残念ながら、ならずに亡くなってしまった。

→石川島に、軽犯罪の罪人たちを集めて更生する施設(木工など)を作った功績

・下関カモンワークから歩いて10分くらいのところに、田中絹代記念館があって、今は入館料もタダで、是非、行ってみては。